

# 27年前の「横浜事件」映画 続々再上映

戦時下の治安維持法による言論弾圧を題材に、27年前に富山県朝日町などで撮影された映画「横浜事件を生きて」が今、各地で上映されている。生き証人として事件を語り続けた元雑誌編集者、木村亨さん（1998年に82歳

で死去）を追ったドキュメンタリー。戦争に批判的な言論人らを取り締まるため警察が拷問で事件をつくり上げていく過程が当事者の証言で生々しく再現され、反響を呼んでいる。（伊東浩一）

# 言論封じへの危機感

## 「共謀罪」審議の中「歴史の教訓に」

三月下旬、長野県岡谷市で開かれた上映会。スクリーンの中で、生前の木村さんが問い掛ける。「『おまえたち、ここを殺していいんだぞ。天皇陛下の命令だ』と（警察官が）堂々と言う。まさに殺されてつた。こんなむちゃくちゃ



な時代を想像できますか」  
雑誌「中央公論」の編集者だった木村さんは四二年、朝日町出身の国際政治学者、細川嘉六らと新潟県境の親不知海岸を観光し、同町の旅館「紋左」に宿泊。だが、警察はこの集まりを共産党再建を準備す

**横浜事件** 1942年、細川嘉六(1888~1962)が雑誌「改造」の掲載論文を「共産党の宣伝」と批判され、警視庁に治安維持法違反容疑で逮捕された。その後、神奈川県警特別高等課(特高)が押収した紋左の写真をもとに、細川らが共産党再建準備会を開いたとして、同容疑などで言論、出版関係者ら60人以上を投獄。拷問で4人獄死、30人余りが起訴される戦時最大の言論弾圧事件となった。2010年2月、元被告5人の刑事補償を巡る横浜地裁決定は「共産党再建準備会の事実を認定する証拠はない」とし、「実質無罪」と認められた。

▲ 映画「横浜事件を生きて」の中、木村亨さんが横浜事件について語る一場面 ©レテオプレス

した。  
映画製作では、朝日町で木村さんらを接待した芸者、横浜拘留所の看守らにも取材。証拠がない中、事件がくり上げられた実態を浮き彫りにする。「情けないことに、あの侵略戦争に屈し、拷問に屈したが、もうこれ以上は許せない」。木村さんが再審請求で冤罪を勝ち取ることを誓い、涙ぐむ場面で映画は終わる。  
上映会を企画した毛利正道弁護士は「大きな衝撃を受けた。今、政府は共謀罪(組織犯罪処罰法改正案)の成立を目指しているが、治安維持法の制定時にも、政府や警察は「乱用はしない」と再三説明していた。実際には拡大解釈され、戦争に反対した人たちが摘発された。歴史的教訓としなければならぬ」と語る。

## うれしさより「怖さ」

映画制作会社の代表



映画「横浜事件を生きて」の再上映の動きについて語る松原明さん(東京都板橋区) ©レテオプレス

「横浜事件を生きて」(一九九〇年製作)は今年に入り東京都や神奈川県、長野県など二十カ所以上で上映されたり、上映が予定されたりしている。三十年近い時を経て再上映されていることに、製作会社の「レテオプレス」(東京都)代表、松原明さん(左)はうれしさよりも危機感を抱く。  
映画の上映は、一月に都内で開かれた共謀罪を考える集会以て上映されたのをきっかけに各地に広がった。「過去の歴史を作品にしたつもりだった

## 「時代」ここまで来たのか

「横浜事件を生きて」はDVD(税抜き五千円)を購入すれば自由に上映会を開くことができる。問い合わせはレテオプレス(電話03(35530)08588)へ。  
「共謀罪」は「違法なことはしていない」と居直っている。共謀罪が通れば、再び捜査機関は(強引な捜査をしても)合法だと主張するだろう」と話す。  
「木村さんには戦時中、自分たちがしっかりしていなかった、権力に屈してしまったという悔いがある。生きていければ、今度こそ、主権者である市民一人一人がきちんと声を上げるべきだ」と訴えるはずだ。  
「横浜事件を生きて」はDVD(税抜き五千円)を購入すれば自由に上映会を開くことができる。問い合わせはレテオプレス(電話03(35530)08588)へ。